

「花祭再考」に寄せて

東京文化財研究所 久保田裕道

いま、なぜ「花祭」なのか。いまさら花祭なんて、と思う向きもあるかもしれないが、そこを敢えての花祭である。愛知・長野・静岡の俗にいう三信遠地域に伝承される花祭は、民俗学研究を志す者であれば一度は見ておかねばと言われるほどの存在であった。しかしその儀礼体系の複雑さに加え、重層的な歴史的な変容や伝承地ごとの多様性が、その把握を困難にさせ、研究者の解明を阻んできたともいえよう。さらに、近年の過疎・少子高齢化に伴う変貌も、花祭の継承存続そのものに深刻な影を落としており、もはや往年の行事を見ることは叶わないと、悲観的に捉える研究者も多い。

しかし、それでも花祭は継続している。伝承者のあり方や時間は変われど、「寒い・眠い・煙い」花祭は、未だ継承されているのである。そして花祭研究もじわじわと進められてきた。早川孝太郎が世に知らしめ、折口信夫、そして五来重らが語り、本田安次、三隅治男が引き継ぎ、さらに武井正弘、山本ひろ子、中村茂子、そして今回の講演とシンポジウムで登壇される山崎一司、井上隆弘といった研究者が、詳細な調査によって新たな資料を見つけ、新たな見解を打ち出してきた。

五来重は、まずそれが修験の芸能であることへの理解を得るために腐心しなければならなかったが、もはやその前提は周知のこととなった。湯立神楽と修正会の延年芸能の複合だという五来重の考えも大いに頷けるところではあるが、一方でその複雑な要素がどのように複合し形成されたのかは、未だによくわかっていない。特に儀礼の根幹を占める神霊観念については、いま一度丁寧に考えるべき課題であろう。

2017 年はじめ日本宗教民俗学会では愛知県東栄町下栗代の花祭についてフィールドワークをおこなった。その結果も踏まえつつ、今だからこそできる花祭研究とは何か。五来重の花祭論を踏まえ、近年の研究成果にも目を配りつつ、これからの花祭研究を考える契機となるようなシンポジウムとしたい。